

小児の貧困問題と健康について

連載②

北病院小児科 医師 近藤 知己

2月に行われた全国の民医連小児科に通院する患者への貧困についてアンケートの結果では、どんな項目に差が出ているか、検証してみました。まず、子どもの状況では、肥満、学校を休みがち、医療機関の受診を控えたことがある、時間外に受診、

インフルエンザワクチン未接種、などといった状況が貧困群で子どもが高い項目です。喘息やアレルギーなどが多いかと思われましたが、差はありませんでした。

保護者の状況では、20歳代などの若い世代が多い、仕事に就いていない、非正規雇用、最終学歴は高卒以下、母親の喫煙、健康状態も悪い、などの状況が浮き彫りになっています。世帯の状況では、母子家庭、2世帯以上、国民健康保険、住居は借家、部屋数が少ないなどが貧困群に多いことが判ります。

自由記載欄から見ると、「子ども

医療費助成制度があつてよかった」「医療費が高いので、民間療法などで

様子を見ることがある」「両親や子どもの介護、看護で、生活にゆとりがない」などの意見が寄せられました。

こうして見ると、貧困というものが子どもの健康や将来へ与える影響は非常に大きいものがあります。今回、同様に行われた新生児産科のアンケートを見ても、貧困群では、若年妊娠が多い、複雑な家族関係、出産後も正規就労が少ないなどの特徴が挙げられています。改めて、貧困が個人の問題でなく、就労、教育、保育などの社会的な問題であり、どのようにしていいか、皆さんで考えていく必要があります。